

泉 雅博著

『海と山の近世史』

米家 泰作

近世日本の村落を「農民」ばかりで構成された「農村」として見る一面的な理解は、歴史学や民俗学、そして評者の関わる歴史地理学を含め、様々な研究者の努力によって、今では過去のものとなりつつある。とりわけ一九八〇年代以降、その努力が積み重ねられた背景に、「非農業民」に目を向ける網野善彦氏の影響力があつたことは疑いない。網野氏は一九八〇～九〇年代にかけて日本常民文化研究所（神奈川大学）を活躍の場とされていたが、本書の著者はちょうど時期的に重なる形でこの研究所に職を得て、いわば網野史学とじかに接するなかで研究を展開してこられた。本書はその成果をまとめられたものであり、著者が一九九〇年から二〇〇七年にかけて公表された論考を所収している。その目指す所は、著者の言葉によれば、海村と山村の「百姓の生活のあり様を、生業・諸稼ぎを中心にして分析した論考を集積した」（一八頁）ものだという。その意味で本書は、網野氏の提起した「非農業民」という切り口を日本近世史において展開した試みとして、読むことができるだろう。

書 評
これまで様々な研究者が近世村落の「非農業民」に関わる研究を積み重ねているが、多くは漁業、林業、木工、交易、その他

諸々の職人や稼ぎといった個別の対象ごとに研究が分化し、個々の文脈のなかに限定される形で、古典的な百姓像や村落像に異議申し立てが行われることが多かった。評者もまたその一人に過ぎず、山村のみを狭い守備範囲としてきたことを最初に断つておかなければならない。これに対して、海と山の両者に調査の手を伸ばしてこられた著者のお仕事は、実に貴重である。網野氏においてさえ、「非農業民」のなかでは海民や職人に関心が収斂し、山民に對しては実質的な論及が少なかつたことを思えば、海村と山村の研究がどのように交差するのかが、本書の書名は様々な可能性を期待させてくれる。

左に示したように、本書は序章と三部からなる本論、そして「終章にかえて」によって構成されている。

序章 本書の課題と構成、そして展望

第一部 海の発見

第一章 能登と廻船交易

第二章 無高民の存在形態

第三章 時国家と北前船交易

付論一 水吞像再考の視点

付論二 北からの便り

第二部 海と交易

第一章 海村と海域

第二章 海村と日本海交通

第三章 海村の都市的展開

第三部 山と交易

第一章 山村と林産物交易

第二章 塩の流通と起業

付論一 飢饉と遊樂

付論二 狐師と狩狐

終章にかえて 原体験としての戦後史学

本論のうち第一部と第二部第一章・第二章は奥能登の海辺を舞台としている。第一部は日本常民文化研究所の「奥能登時国家調査」に著者が参加した成果であり、第二部もその続編といふべき内容である。この調査から受けた衝撃を網野氏は様々な場で繰り返し述べておられるが、そのなかで著者の成果も度々紹介されており、それを通じて著者の研究に接した読者も多いと思われる。これに対して第三部の舞台は山村に移り、山梨県史に参加された成果が中心となっている。全体として、おおむね四分の三が海に当てられ、残る四分の一が山に関わる内容だといえる。以下、本書の構成に従って各章の内容を概観していききたい。

序章「本書の課題と構成、そして展望」は、一般的な研究史の整理を伴わない「自分史めいたもの」(一頁)として書かれていることが目を引く。著者の最初の師である長倉保氏の立場は「幕藩体制構造論」であり、これを含む戦後歴史学への問い直しとして一九八〇年代には社会史への移行が展開していく。幕藩体制構造論において矮小化されがちな村と百姓の再評価を意識していた著者にとって、一九八〇年代における「奥能登時国家調査」と網野史学との遭遇は決定的な出来事であり、「家父長的隸農主」と見られてきた時国家が、豊かな海の世界を隠し持っていたことに

衝撃を受ける。そこから発せられた問題意識、すなわち近世の百姓がもっていた「農民」以外の多面的な性格の追求が、著者の目指す所であり、「海と山を中心とした生活の営みを、それぞれの地域社会の歴史のなかで正確に捉えること」(一〇頁)が本書の目的とされる。そこから開ける展望として著者は、日本の近世をいわゆる社会構成的な時代区分における「封建社会」とすることに懐疑を示し、百姓の世界に「資本主義」を見いだせるとする。

第一部「海の発見」には、著者が百姓のうちに「非農業民」を発見した時期の論考が収録されている。第一章はその出発点にあたるもので、かつて「家父長的隸農主」とされた奥能登の時国家ならびに時国村(現石川県輪島市)を、廻船交易の担い手として位置づけなおす作業である。著者は、主に械(權)役に関する資料から、廻船業が近世半ばの停滞期を挟みつつも、活発に営まれていたことを示している。時国家は一七世紀におけるその代表的な経営者であり、同時に、農業経営や製塩業をも含む企業家であったことになる。時国家のほかにも廻船主や商人がいたことが示されているが、彼らは農地をもたない無高百姓(水呑)であり、加賀藩では頭振(あたまふり)と呼ばれる存在であった。

この頭振の位置づけを再考する作業が、第二章「無高民の存在形態」である。著者は、村方に居住しながら石高を持たない頭振たちが、諸々の職人、商人、狐師といった様々な非農業的な生業に従事していたことを、主に藩政史料から浮き彫りにしている。頭振たちは藩政においては経済的基盤の脆弱な人々として認識され、それが後世の研究者たちの理解にも影響していたが、著者はこの頭振たちが能登においては海辺の村方に多く、そのような村

方では様々な役負担と高い定免率が特色であり、むしろ廻船交易や商工業の展開を通じて都市的な場を發展させた人々として捉える。

第三章「時国家と北前船交易」は、第一章の時点では未発見であった稗の下張文書や廃棄寸前の史料などを手がかりとして、近世後期の時国家の北前船交易にアプローチする。積荷や取引に関わる断簡を読み解き、存在が疑われていた北前船を見いだした著者は、幕末の時国家において農業経営よりも廻船業の比重が高かったことは疑いないと評価しつつも、その史料が通常の伝来文書にほとんど含まれていないことを重く受けとめている。家の由緒や村落の運営に関わる史料は保存されながら、経済的には重要であった廻船業関連の史料は不要と判断されたことを意味しているからである。第一部はさらに、第二章を補足する付論一と第三章を補足する付論二をもって閉じている。

第二部「海と交易」において著者は時国家から離れ、能登半島と伊豆半島にさらなる事例を求めている。第一章「海村と海域」はやや史料紹介的な色合いが強いが、能登半島の先端、珠洲岬に位置する寺家村（現石川県珠洲市）の寺院（専念寺）から再発見された史料を中心として、この港と寺院の井戸の修築をめぐる寄港船のネットワークの広がり論じられている。なお著者はこの作業を、「海からの地域史」という意味で、「海域史」と呼んでいる。

続く第二章「海村と日本海交通」では、著者は同じく能登半島の北端近くに位置する馬繰浦（現石川県珠洲市）を例として選び、有力な百姓であった狩野家に伝わる近世後期の船客帳を再検討し

ている。近世の馬繰を避難港とみる従来の理解に対して、著者は他の史料を援用しつつ、塩と製塩の副産物である灰の積み出しで栄えたことを推測している。この見方は、ややもすれば農産面で不利な能登における百姓の貧しさの象徴として言及されてきた製塩を通じて、海村における都市的な性格や企業的な百姓のあり方を再評価する必要性を示唆している。

この課題を受ける形で、「海村の都市的展開」を題目とする第三章は、現在の静岡県伊東市域の海村を舞台として、無田（水呑）と称された無高百姓が海村に広く存在していたことをまず確認する。この作業は第一部第二章で為された頭振の検討と問題意識が共通する点が多いが、無田たちの生業を直接示す史料には乏しい。そのため著者は、主だった海村における明治初年の築港計画などに着目して、江戸（東京）に廻漕された魚、山葵、茶、椎茸といった山海の産物の盛んな交易を浮き彫りにしている。さらに、村落の正規の構成員ではない住人や逗留者の生業にも言及し、これらの人々を村の「周縁的」諸相として捉える。

山村に舞台を移した第三部では、まず第一章で甲斐国の東部、都留郡（郡内）における林産物交易が論じられる。近世中期以降、農業に恵まれず貧困な山村という理解がすでに定着していたことを確認した上で、著者は奈良子村（現大月市）や道志村（現道志村）、丹波山村（現丹波山村）、成沢村（現鳴沢村）ならびに林産物の集散地であった新田村（現上野原市）の史料を渉猟しつつ、実際には材木の生産と移出が盛んであったことを示している。貧困という山村像と豊かな実態との齟齬に関して、著者は前者が「農本主義」な志向と装いを持っていたと指摘する。

続く第二章は、近世後期の甲斐国への塩の流通において、新たな製塩地との繋がりや塩田造成によって、既存の特権的な流通機構のなかに新規参入を試みた人々に焦点を当てる。ここで検討されている史実が山の世界とどのように関わるものか、本書には明確な説明はないが、序章の展望と関連づけるならば、百姓のもつ資本主義的な営みに光りを当てる試みとして読むことが可能である。「農本主義」を理想とする幕藩体制において、否定的に捉えられがちであった村方の商業資本家を、積極的に評価する作業だといえる。なお第三部には、天明飢饉における甲府と村方の対応および甲斐国の獵師たちの特権的な由緒に関する二つの付論をもつて閉じられている。

以上の本論に対して、結びに置かれた「終章にかえて」は、本論の総括というよりは、序章で示された「自分史めいたもの」の再確認だといえる。というのも、著者に強い影響を与えた二人の師、長倉保氏と網野善彦氏に対する著者の評価が下されているからである。著者の歴史学者としての出発点は、いわゆる社会構成体の発展として歴史を見て、日本社会の民主化を求めた戦後歴史学であり、それは最初の師である長倉氏の立場でもあった。そこでは近世日本は封建制の段階にあるとされ、封建的土地所有の鍵である小農の成立・展開・崩壊が、歴史の「進歩」として捉えられる。しかし網野氏の立場は、自然の開発と生産力のあくなき向上を「進歩」とみなす前者の立場を、批判する側にあたる。網野氏を第二の師とし、封建社会の構成員たる「農民」として百姓を見るのでなく、その非農業的あるいは資本主義的な面を探る道に進んだ著者は、「身を引き裂かれるような思い」（三八一頁）を感

じたという。

以上、本書全体を通じて、近世の百姓がもっていた非農業的な性格を掘り起こそうとする意図は明確であり、その意味で「非農業民」概念を近世史研究に展開した著者の作業は積極的に評価されねばならない。とくに、村落の「百姓」のなかに、農業や農地から遠く離れ、多様な生業に従事していた人々が広範に存在していたことを検証した部分（第一部第一章・第二章、第二部第三章）は、古典的な理解においては社会の周縁的存在でしかなかった無高百姓（水呑百姓）のイメージを、鮮やかに逆転させるものである。

その際、著者の着眼点として有効に機能しているのが、「百姓」身分の再検証であろう。本書には一方で、海辺や山間、あるいは港湾といった地域ごとが生業の諸相を示す作業も含まれている（第一部第三章や第二部第一章・第二章、第三部第一章）。こういった作業においては、特定の地域環境において特定の非農業的な生業が形成され、いわば空間的な分業が成立していたことが明示されることになる。こうした生業は、より古典的な理解のなかでは、あたかも副次的あるいは個別的な事例であるかのように受け取られがちである。というのも、海村や山村が二次的あるいは周縁的な空間だと見られる限り、農村を構成する農民が本来的な「百姓」のあり方だとする理解は容易には崩れないからである。これに対して、とくに第一部第二章と第二部第三章で著者が示した無高百姓（頭振・無田）の分布は、海村に多い傾向があるとはいえ、海岸から離れた平野部や山間部にも及ぶものであり、農業

だけでなくそれ以外の諸々の生業が百姓を支えていたことを雄弁に物語っている。

その意味で、「江戸時代に生きた人々の姿を、制度的な身分呼称によっておしはかることの危険性」(一三一頁)を再確認させられるのであるが、このことは村落の立地分類に対しても当てはまる。第一部の付論「水呑像再考の視点」で著者が示唆するように、地方の小さな中心地や宿場は、たとえどれほど都市的な性格を帯びた場であっても、近世の行政においては「町」ではなく「村」として位置づけられる。その住民は石高つまり農地を所持していなければ名目上は「水呑」となるが、その「村」の農業以外の経済が豊かであるほど、本百姓が富裕で水呑は貧困という先入観は逆転することになる。著者の視点は、社会的にも空間的にも周縁のものと見なされてきた非農業的な生業が、実際の近世日本においては広範に展開していたことを想像させてくれる。このことは、本書が論じた問題が、海村と山村に限定された事象ではないことも示唆している。

右の視点を得るために、著者が史料の発見と博搜に苦心をされたことにも付言しておかなければならない。無高百姓の職種を示すために、著者は村落単位で幾つかの史料を組み合わせることによって有意な推測を導き、個々の家文書においては襖の下張りに至るまで丹念に読み解くといった作業を重ねてこられた。そのような努力を強いられる原因について、著者は随所で言及している。それは、「公的あるいは制度的な文書は、農本主義の装いをまとうてあらわされる」(三〇〇頁)ためであり、また家文書においても、永続的な価値をもつ不動産(農地)に関するものは別とし

て、該当の生業が休止すれば関連史料も廃棄されやすいためである。このような史料の偏りは、後世の研究者たちにも強い影響を与えてきた。著者は、農業を良しとして無高百姓を否定的に捉える施政者側の視線が、研究上の古典的な水呑百姓像や山村像につながっていると指摘している。このことは、過去の社会において支配的であった表象のあり方に後世の史観も否応なく影響されていること、そしてまた、史料に立脚した実証主義がかつての表象を追認しがちであることを物語っている^④。

著者は右の問題を調査のなかで何度も繰り返し実感し、残された課題の深刻さを噛みしめられたに違いない。改めて本書全体の構成を振り返るならば、「通常行われているような純粹な形での研究史整理は困難」(一頁)とされた特異な序章と、これと対なる「終章にかえて」において著者が意図していたものは、農本主義的な史観からの決別という重い作業であったようにも思われる。それゆえに、戦後歴史学に対して吐露された著者の記憶と批評は、歴史学研究者としての存在をかけた重みがあり、かつ著者が根底で抱いておられる問題意識をよく表しているものである。しかしながら、評者の率直な感想としては、ここに示された大局的な問題意識に併せて、やはり著者による研究史整理と、より具体的な課題や方法論の議論を拝読したかったと思う。それもまた後進にとつては有益であると信じるからである。

例えば、序章では言及されていないが、近世の百姓が広範に展開していた非農業的な稼ぎについては、歴史学からは深谷克己・川鍋定男両氏の研究を、歴史地理学からは溝口常俊氏の成果を挙げることができる。両者はともに、農業から遠く離れた百姓の姿

というよりは、個々の百姓家のなかに農業／非農業にまたがる生業の複合性を見いだすものだと見える。さらに、林産物の生産を強調する著者とは対照的に、溝口の論著に含まれる焼畑論は、たとえ石高が僅少なものであっても、近世山村において焼畑が重要であったことを示しており、山民の生業として農業（焼畑）を軽視することもできないことも注意しておきたい。さらに深谷氏は、近世の非農業的な生業を後景に追いやる施政者側の視線が、様々な稼ぎを抱える百姓たちを「農民」の範疇に一括していたと論じている。^⑦

右の深谷氏の議論は、近世は「農本主義を国是としたような時代」（二九九頁）だったとする著者の視点と軌を一にしている。この「農本主義」によって近世の百姓と村落は政治的に編成されたということは可能であり、評者もまたそう考えるものである。その意味で、非農業民のみを掬い取る作業は「農本主義」へのアンチテーゼとしては有効であり、本書がそれを端的に示していることは疑いない。ただし、「農」と「非農」がどれほど分別できるものか、この両者の間で百姓たちがどのように融合や交雑、競合を果たしたのか、そこまで見ることによって、よりいっそう非農業への理解が深まるようにも期待される。そのように評者が考えるのは、どちらかといえば海村に比重の大きい著者に対して、評者の起点が山村にあり、ここでは林産物の生産や管理も、植生のマネジメントという意味では農業や半栽培の延長なしに拡大という性格を帯びていたことが大きい。少なくとも山村では、農業と非農業は分離できない営みであったといえる。

なお、本書に収録されることになる研究を著者が展開されてき

た同じ時期に、歴史学においても、まとまった近世海村論^⑧、近世山村論^⑨が提示されている。これらも残念ながら本書の序論においては言及されていないが、その紹介や本書との比較はこの書評の役割を越えている。しかし著者が「海・山の視点に立った研究は乏しい」（二六八頁）と嘆息する状況は、少しづつ改善されていることは言い添えておきたい。

① 著者が網野氏について論じたものとして、本書の「終章にかえて」のほかに、泉 雅博「時国家調査で得たもの」（神奈川大学日本常民文化研究所編『海と非農業民——網野善彦の学問的軌跡をたどる——』、岩波書店、二〇〇九年）一一一―一二四頁。

② 拙著『中・近世山村の景観と構造』、校倉書房、二〇〇二年。拙稿「山村」概念の歴史性——その視点と表象をめぐって——、民衆史研究六九、二〇〇五年、三―二〇頁。

③ 例えば、網野善彦『日本社会再考——海民と列島文化——』、小学館、一九九四年、一一―一六頁。同『日本』とは何か』講談社、二〇〇〇年、二五五―二七四頁。

④ この問題については、白水 智「知られざる日本——山村の語る歴史世界」、日本放送出版協会、二〇〇五年、が示唆的である。拙稿「書評 白水智著『知られざる日本』」、歴史地理学四七（五）、二〇〇五年、二九―三三頁。

⑤ 深谷克己・川鍋定男『江戸時代の諸稼ぎ』、農山漁村文化協会、一九八八年。

⑥ 溝口常俊『日本近世・近代の畑作地域史研究』、名古屋大学出版会、二〇〇二年。

⑦ 深谷克己『百姓成立』、塙書房、一九九三年。

⑧ 例えば、山口 徹『近世海村の構造』、吉川弘文館、一九九八年。
⑨ 例えば、前掲④白水著書のほか、笹本正治『山に生きる——山村史の多様性を求めて——』、岩田書院、二〇〇一年。大賀郁夫『近世山村社会構造の研究』、校倉書房、二〇〇五年。加藤衛拓『近世山村史

の研究——江戸地廻り山村の成立と展開——』、吉川弘文館、二〇〇七年。

(A5版 三九二頁 二〇一〇年二月 吉川弘文館)

税別一七〇〇〇円)

(京都大学文学研究科准教授)